香椎浜高等学校生徒会！！

音舞羅　阿瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
香椎浜高等学校生徒会！！

【Ｎコード】
Ｎ４６９２Ｎ

【作者名】
音舞羅　阿瑠

【あらすじ】
福岡県東区にある
香椎浜高等学校生徒会。
僕は、そこに。”入らされた”
ある程度刺激的で、楽しい日常。
過去の事を忘れられる空間。
そして、優先輩。

何を書いていいのか迷うけれど

僕が綴るありのままの日常。
香椎浜高等学校生徒会の日常を描こう。

ありふれているけれど、ここにしかない幸せ。

そんな空気を提供してくれる
優先輩や、生徒会。
僕は日常を、そんな日常を書こう。

Ｎｏ．１「プロローグ又は自己紹介又はエピローグ」

「心の行き場は何処だろう」

Ｎｏ．１「プロローグ又は自己紹介又はエピローグ」

「心は優しい人だから」

止めてくれ。僕は優しくなんてない。
なんでみんなこの仮初の性格に気付かないんだ。
何故これがキャラだと気付かないんだ。
頼むから優しいと言わないでくれ。
僕は卑怯だ。
幼馴染一人として救えなかった愚かな人間だよ。
やめて、そんな優しい言葉をかけないで。
お願いだから…もう僕に優しくしないで。
お願い…お願い…

　ある日僕は出会ってしまった。
あの事件をきっかけに心を閉ざしていた僕に何故かやたらとかかわって来た人。
優先輩。
中学時代、入っていた部活の部長をやっていた。僕の一年上の先輩。
何故だろうか、次第に彼女の前では本当の自分でいられた。
彼女の前では、仮初の性格など出せなかった。
何故だろう。
　気になり、気になり、気になり…
そして、とうとう僕は自分から彼女に話しかけるようになった。

「“こころ”君“こころ”君！」
「優先輩、何度言えば分かるんですか。僕の名前は心と書いて“しん”です。みんなが真似してこころと呼ぶようになっちゃったじゃないですかぁ。」
「じゃぁこころ君～、私にこんな風に呼ばれるのいやぁ～？」
「いやじゃないですけど…んー。いいですよ、好きに呼んでください」
「そうよ、そうよねぇ～」

彼女は常に明るくて、優しかった。
最初は優しくされることに抵抗があった。
騙されているのではないか。そう思ったからだ。
だけれど、そんな警戒もすぐに薄れて、今では全くない。
僕の歪んだ性格も大分修正されてきているみたいだ。

そして、中学卒業の時。
僕は優先輩の進む高校の事を聞いた。
そして僕は優先輩と同じ高校に行くべく勉強に励んだ。
その日から僕は目標をもった。
生まれて二度目だ、目標を持ったのは。
そして、僕は勉強に勉強を重ね…
ついに優先輩と同じ高校へと進学を果たしたのだ。
入学式には優先輩と再会し、優先輩が今何をやっているのかを聞いた。
「私ね、今生徒会やってるの！」
「ゆ、優先輩が生徒会ぃっ！？」
「こころ君、そんなに驚くことないでしょぉ～」
「イメージないんですもん。」
「それってぇー、私がだらしない。又は頼りないってことぉ～？あぁ～っ　こころ君ひどいんだぁ～っ」

「そんなことないですけど…生徒会って、役職は？」
「えっへん！　よくぞ聞いてくれたぁ」
…どうせ書記だろう。
「私は…生徒会長！　生徒会長朝霧　優よ！」
「せ、せ、せ、生徒会長！？！？！？」

No，2「生徒会に入りなさい！」

Ｎｏ．２「生徒会に入りなさい」

入学式から数日が過ぎ、僕が生徒会副会長になったのには、次のような経緯があった。

±∓±∓±

「こころ君こころ君！」
「なんですか？　優先輩」
「君…生徒会に入りなさいっ！」
…へ？
僕はとっさのことに腑抜け面を作ってしまった。
「だからぁ～生徒会に入ってって言ってるのぉ～」
「生徒会ですか…そういえば、４月１２日にあるらしいですね、選挙。早くないですか？」
「うちの学校はそうね、早いかもしれないわね」
「１年生がまだ学校入ってすぐじゃないですか」
「いいからっ！　副会長だよっ！　私の傍で働いてよ～ね？　懐かしい中学時代を思い出しなさい？　二人で切磋琢磨してあの部活を持ちなおしたでしょっ！？」
「そうですけど…」

それは真実だ。
だけれど、部活と生徒会とでは訳がちがう。
まぁ、優先輩の傍で働けるのは凄く嬉しいことだけど…
僕には、学校を背負うなんて荷が重い。

でも、今思い返すと優先輩の傍に居たいから、この学校に入ったのだ。
入学式から数日立っている。
今は、９日。もうすぐ選挙ではないか。
資料は前日までに提出すれば大丈夫だけれど
演説とか準備がある。
「出てもいいですけど…」
「いいのっ！？　決まりっ！　じゃぁさっそく！…」
「話は最後まで聞いてくださいっ！　もう、先輩はいつもこうなんだから…えっとですね、資料は前日まででいいですけど。演説とか、タスキとか活動してないですよっ？」
「大丈夫～大丈夫～っ！　私と一緒に演説考えましょうっ　タスキは作って来たわっ　活動は、毎日毎日放課後やればいいのよ」
「そういうもんですか？…ってタスキもう作ってきてるんですかっ！？」
「そうよ、作って来たわ。早速、今日の放課後活動を行って、夜に私の家に来なさいっ一緒に演説考えて、練習しましょっ」
「…わかりました、では放課後に…」
「うんっ！　ありがとうっ！　また放課後ねっ」

優先輩は覆いかぶさるように言うと、手を振り走って自分の学年の階へと向かった。
一年生の教室は３階。
二年生の教室は２階。
三年生の教室は１回。
分かりやすい設計だ。
そして僕は１年Ｂ組。先輩は２年Ｃ組。

今はお昼の時間だった。
お昼、日が射してぽかぽかと暖かい廊下に出て友達と一緒にお昼を食べていたら…
いきなり優先輩がやってきて、あんな突拍子もないことを言い出したのだ。
おかげで友達は唖然。
僕はお弁当の前に腰をおろし、ぽかぽかと差し込む日差しを背に、再びご飯を食べ始めた。

「ほんっと優先輩と仲いいよな、お前」
「まぁね、中学時代の縁だしね。」
「いやぁー、それにしても俺はお前が生徒会に入るなんて話し受けるとは思わなかったなぁ。」
「どうせ、落ちるでしょ。僕なんて」
「いやいやぁ、わっかんねーぞー。うかるかもしれんぞ」
「言うなって」
「でも、優先輩のお傍に居たいんじゃないか？」
「それは…」

…はぁ。こいつは鋭すぎる。
こういうところが僕は少し苦手だったりする。
だけど、悪い人じゃない。
むしろ良い人だ。良い人すぎるほどに良い人。

とにかく僕は、その日の授業をさらっと受け。先輩の待つ校門へ

と行った。
辺りは夕焼けでオレンジ色に染まり、この街を温かい色で染めている。
僕はオレンジという色が好きだ。
あたたかくて、やわらかくて、やさしい。

「あ！　こころ君！」
優先輩が走ってくる。
僕は歩いて優先輩のところへと進む。
「こころ君遅いよっ　はい、これっこころ君にぴっったりなタスキだよっ！」
「うん。シンプルでいいですねー」

流石優先輩、僕の趣味が分かってる。
僕はシンプルイズベストという思想の信者で、華美なものをとことん嫌う。
他の生徒は赤や青といったペンで自分の名前を書いている中、
僕はただパソコンでフルネームを書いてあるだけのタスキをかけている。
周りの人たちが熱心に活動し始めたので、僕らも活動を開始することにした。
「副会長候補！　会長であるこの私が推薦する。深井　心君ですっ！　よろしくお願いしますっ」
「よろしくお願いしますっ！　よろしくお願いしますっ！」

…効果はあるのだろうか。
一体どれほど票が入るのだろう。
というか、入んないだろう。票なんて、入れるのはあいつくらいだな。

活動を熱心に続けていると、日が暮れた。
日が暮れ、学校に誰もいなくなったところで候補者も皆帰りだす。
そして僕達は、優先輩の家で演説を考えて練習することになった。
家には電話を一本。
優先輩のところに行くとは言わない。
だって、後で絶対からかわれるじゃないか。

しばらく歩いたら、優先輩の家がある。
学校からは近いのだ。
「ここが、私のお家よっ」
「知ってますって、何回かお邪魔したことがあるでしょう」
「あははぁ〜っ　そうだったわねー」

数分で優先輩の家に着いた。
外見は…うん、普通。
安心するほど普通。
かなりアットホームな感じな家なのだ。
いろいろ癒される。

「お邪魔しまぁーす」
「ただいまでしょ、先輩は。　お邪魔します」
「ちょっとぼけたのよ〜っ　こころ君ナイス突っ込みっ！」
…今のは突っ込みじゃなく、ボケ潰しのつもりだったんだけどなぁ。

それにしても、やっぱり優先輩の家は落ちつく。自分の家より落ちつく。

落ちついた色の壁紙、ふかふかでやわらかい赤色のソファー。
リビングにはごちゃごちゃしたものが置いていなく、シンプル。
　優先輩の部屋は、女の子の部屋という感じの物もあるのだけれど、ところどころ僕が模様替えを手伝ったので僕の趣味も入っている。
薄茶色の勉強机。木の椅子。
ふかふかのベッド。その上にはかわいらしいぬいぐるみ。数人で作業するための身にテーブルが真ん中に。
その周囲にはオレンジ色の座布団。
本がいっぱい入っている棚。
どれをとっても僕にとってはすごく落ちつくのだ。

「さぁ、こころ君！　演説考えなきゃねっ」
「ここにはいっぱい資料があるんだからぁ」
「資料って…また本とか、過去のアメリカ大統領の演説とか？」
「…なんでわかったのっ？」
「先輩が本の影響受けやすい事はしってますし、他に先輩が用意する資料といったらそういう分かりやすいのしかないでしょう」
「…あばば」

…まったく、学校の生徒会選挙の演説であんな国際的な演説が参考になるわけないじゃないか。先輩は、こういうところが抜けている。
　本当にどうするつもりなのだろうか。誘っておいて、ノープランはないよね、うん。
そう考えたい。
「わかったわよぉ…一から考えましょう」
「そうしてください。」
「やっぱりあれよね、自分の経験を織り込むべきよねっ！…ここ

ろ君、中学校時代の副部長経験を語りなさい」
「え、え、え、えーーー！？」
「あれが一番いいじゃないの、演説のネタにしてはねー。私と手を取り合ってあの部活を再興した時のことを演説にしましょう」
「いいですけど…なんか少し気が引けます。」

中学校時代の副部長した経験。
あれは…一種の黒歴史だ。
優先輩と一緒に楽しく働いたのは、いい経験だけれど。
できればあの部活のことは思い出したくないなぁ。
「じゃぁ、それで考えましょう」
「ここからは無言ですよ？　先輩。」
「ぶ～。こころ君と喋りたいもんっ」
「後にしてください。」

先輩はふぐのように頬をぷっくりと膨らましている。
拗ねていても全く怖くもないし。
逆に可愛らしい。
結構拗ねると怖い人がいるのだけれど…
そして先輩も無言で作業に移り、二人別々の演説文を書いた。
それを掛け合わして良いのを作ろうということになったのだ。
先輩と一緒に作業をするのは久しぶりだな。
なんだか少し嬉しい。

「できたわっ！」

「僕もできましたよ」
「せーので見せ会いましょう！」
「「せーの！」」
僕は先輩の書いた演説文を、優先輩は僕の書いた演説文を読む。

…ふむふむ、なるほど。こういう感じか。
優先輩の演説文の良いところは、自分の経験を多彩に取り入れ、そこから学校生活への事につなげている。
これは演説文としてはいいな。
だけれど一つ欠点。

…お笑い要素がある。
先輩の文だからしょうがないか。とは思えるんだけど、やっぱりお笑い要素が強すぎる。
僕はそんなキャラじゃないぞ、全校生徒にどういうキャラを植え付けるつもりだよ、この人。

僕はその意見を率直に先輩に伝える。
すると、先輩も僕の文について良いところと悪いところを挙げた。
「こころ君の文はね、演説には良いかもしれないけど…やっぱり固い！　もう少し崩した文じゃないと、多くの人に受けないわよっそれに、あんまり自分の経験を入れてないじゃないの。だけど、まぁ最初のつかみはいいかもしれないね。」
「じゃぁ、この二つを掛け合わせますか。」
「待った、それは私に任せてっ！　こころ君」
大丈夫なのかな。
でもまぁ、一応尊敬しているので信頼して任せることにする。
数分立って、優先輩がいきなり大声をあげて叫び出した。

出来たらしい。
「よし、出来たよぉっ！　これで本番に臨みましょう！　早速練習よ！」

＋＝＋＝＋＝＋

まぁ、そう言った経緯があって。
今の生徒会副部長という役職に就いたのだ。
そして、毎日毎日大変な人達に囲まれ、刺激的な日々を…否応なく送らされている。
…はぁ…

Ｎｏ，２「生徒会に入りなさい！」（後書き）

エンジェルマジック（今の名前は天と大地と魔界と〇〇）
お休みします。
構成をもっと練りなおします。
２年後くらいには復活するんじゃないでしょうか。
その変わりの物を書きます。
３つ位書いてないとなんか落ちつかなくて

それがこれです
今回は、ファンタジーはなく

学園物。
ただちょっとミステリアスな
ビターな感じです

No．3「とある人物の悩み相談」

No．3「とある人物の悩み相談」

生徒会では、悩み相談も行っている。
これは人の為に働くのが大好きな優先輩の思いつき。
結構評判も良い。
今日も一人、相談に来る。

「1年C組天井　恵です…今日は、私の恋愛相談についてなんですけど…」
「恋愛相談かぁ…キタコレ！」
「ちょっと、優先輩まじめに聞いてあげてくださいよ。いくら恋愛事が大好物とはいえ…」

僕はお茶を出しながら優先輩を注意する。
生徒会の皆は優先輩をお構いなしに叩くのだ。
物理的な叩くではなくて、いじる。突っ込みを入れる。という意味での叩く。

「あのぉ…続けてもいいでしょうか？」
「いいわよー。続けて頂戴っ」
「実は、私の恋の相手というのが…3年生の宮野　修二さんなんです。写真を見てそれで一目ぼれ。あったことはないんですけど…」
「なるほど、写真で一目惚れかぁ…」
「それでですね…相手の事を調べてほしいんです。お願いしますっ！」

恵ちゃんは椅子から立ち上がり、ぺこりと頭を下げる。
優先輩は腕を組んで
「まっかせなさいっ！」
と自信満々。
僕は気付かれないようにため息をつく。
何でこんなに自信があるのかわからない。

「私達生徒会が責任を持って貴方の恋を叶えてあげるわっ！」
「いや、優先輩。頼まれてるのは調べる事までですよ？」
「どうせならくっつけましょうよ！こころ君！」

今度は大きくため息をついた。
すると恵ちゃんが困った顔をするので、ため息を途中で飲み込む。

「でも、任せっきりじゃぁ悪いので、私も一緒に調べます！」
「わかったわ、早速明日から調べましょう」

恵ちゃんはいい子だ！
ここで任せっきりにされたら僕はこの変人の集まりもとい、生徒会の中に飲み込まれながら調べさせられるところだった。
…あれ、そう言えば二人はまだ来てないのかな。

「失礼しました！」
恵ちゃんが部屋から出ていくと、僕と優先輩は二人きりになった。
そして、部屋の中を見渡すと…
会議室にあるような長いテーブルを四角形に並べている。そして、ホワイトボードのところに僕の椅子。
その向かい側に会長・優先輩の椅子。
左がまだ来ていないが　会計・金谷　信一の椅子。

右が、同じくまだ来ていないが…書記・綿釧　利津の椅子だ。
僕はお茶をすすっている。
時計を見ると短い針は4と5の間を刺していて、長い針は2と3の間を刺している。
…まだ来ないのか、変人2号と3号は…

「二人とも遅いわねぇ。」
「そうですね、遅いですねーあの人たち。」

僕ら二人以外の席はガランガラン。
変人2号と3号。そして顧問の先生という名の変人4号はまだ来ていない。
「ごっめぇ～ん！　遅れたわぁっ」
やれやれ、やっと変人2号のお出ましだ。
生徒会書記の綿釧　利津。
才色兼備のお嬢様。
ナチュナルな茶髪。
身長は会長より普通に高い。
でも会長より少し、いやかなり変人。

「遅いよぉー、利津ぅー」
「ごめんねぇー、優ちゃんーこころくんー」
「全く…で、会計は？」
「あぁ、信一君だけどねぇーさっきそこで会ったから、もうすぐ来ると思うわよー」

なにかとあいつとこの書記は一緒の事が多い。一緒ではなくても、わざわざ時間をずらしたり…二人で何をやっているんだろう。

「おはようございます。」

扉を開けて開口一番で間違えているこいつが生徒会会計の金谷　信一。

黒髪短髪。四角い眼鏡をかけていて、その奥に潜む瞳に映るものは誰にもわからないような謎キャラ。

にもかかわらず、変に天然。

そして、以外とオタク。

「今は夕方だよ、普通はこんばんはか、こんにちはでしょう」

「さらりと天然出すのはやめましょう～私の立場ないから！」

「そっちですかっ！？」

「優ちゃんの立ち位置よっ」

「ちょっ、それはいいから。早く今日の議題をっ！」

「はわぁっ！　そうだったわね、そうだった！　こころ君！　ごめん、そしてありがとぉっ」

「はい、では今日の議題は…元々は秋の文化祭のテーマについてだったんだけど…」

「たった今、新しい相談があってねっ！　それについての事を今日から話し合ったり、調査しましょう！」

「どのような相談なのですか？」

「それは、紙にまとめたから見て」

「ふむふむ。なるほど、んなっ！　これは！」

「あぁーあ。出たよ。」

「謎の男子ルートを辿るちょっと危険でビターな女性視点ギャルゲ！　これは攻略が難しいぞ！」

「おぉーぃ、帰って来いー」

「よぉし、解決しましょう！　そうしましょうっ！　あらゆるフラグを立てたこの僕が役に立つ時が来ました！」

「それはゲームの話でしょう、現実には役に立たないと思います

よその無駄な知識。」
「何を言っているんだ心は！　そんなことじゃこの生徒会はやってけないぞ！」
「はいそれ微妙に違うから、間違ってますから。」
「二人とも！　脱線しない！」
「僕も入ってるんですかっ？　金谷が勝手に脱線してるだけじゃぁ…」
「こころ君もそれに一々突っ込むからねぇー、同罪よっ」
「そうだよぉ～」
「と、いうことでぇ～。早速明日から調べましょう！　こころ君は私と一緒に恵ちゃんと3人で調べるわよ、利津と信一君は二人でどうにかして調べて頂戴」
「ガッテン！」

…うわぁ、妙にやる気だ。なんなんだこいつは、気持が悪い。

「じゃぁ、明日からそういう運びで行くわよっ！　あ、そうそう。文化祭のテーマだけど、私とこころ君で考えておくから」
「え！？　ちょ、勝手に決めないでください！」
「君は副会長なのよっ？　ちゃんと会長の補佐をしなさいっ」
「んぐ…」

こういう時に副会長の義務の話を出すのは卑怯だ。ずるい。
でも、やるしかないと諦めてため息を一つ。
文化祭のテーマくらい早く決めて、あとは…
お悩み相談の解決に心血注げばいい。
よし、そうしよう。

「では！　本日は解散！」

本日の生徒会の集まりは終わり、生徒会室を去るみんな。
僕も有先輩と一緒に片づけをしてから、生徒会室を出て、二人一緒に帰る。
もう既に外は薄暗くなっていた。
若干夜の色を帯びている空はほんの少し神秘的で、優先輩の横顔がどこか寂しく見えた。

「優先輩っ」
「ふぇ？　なぁーにー？」
「今日、うちに寄りませんか？」
「え？　いいけど～、なんでー？」
「文化祭のテーマですよ、今日決めちゃいましょうよっ。ほら、この前選挙の時優先輩の家でやったじゃないですか、だから今度はうちでやりましょうよ。優先輩ならうちの親も大歓迎しますし」
「いいわよっ！　じゃぁ、今日はこころ君のうちにねっ！」

途端に優先輩の顔が明るく開いた。
優先輩をうちに呼ぶのはかなり久しぶりだ。
母さんもきっと喜ぶ。
それに、優先輩もどこか嬉しそうに見えるし。
この選択で間違っていなかった。

「こころ君のお家だぁーっ」
「あら、優ちゃんいらっしゃいっ」
「お邪魔してますっ」

部屋に優先輩をあげたら、案の定母さんは喜んだ。
そしてはりきって食べ物を作り、周りの環境を整えてくれている。
優先輩を家に連れてくると、いつも母さんは嬉しそうだ。
何故なのかはよくわからないけれど、どこか保護者的な感情を抱いているのだろう。

「じゃっ！　こんないい環境で会議できるなんて滅多なことじゃないわっ！　早速テーマを考えましょうっ」
「んー…うちの学校の文化祭って、どんなことをやるんでしたっけ？」
「合唱コンクールとか、クラスで出し物とか。まぁ、一般的ね」
「んー…競争…とかは？」
「悪くはないわねー。」
「合唱コンクールも言わば競争ですし、なにか競え合えるような事を今年はするとか。」
「例えば？」
「例えば…劇をするクラスを何クラスか集めて、コンクールをするとか。出店の売上を競うとか」
「よし、候補に決まりね」

優先輩はノートに「競争」と書く。
そして優先輩からも候補を求める。

「私はね、“なんでもあり”がいいと思うの」

なんでもあり…若干放棄気味なテーマだけれど、よく考えればいいかもしれない。
なんでもありということは、いろんな事ができる。
テーマと言うには少しおかしいかもしれないけれど、結構いいかも

しれない。

「なんでもあり…かぁ、いいと思いますよ？」

「じゃぁ候補ね」

…久しぶりの有意義な会議だ。

いつもいつも話が脱線してこんないい会議はできない。

今日は脱線させる人がいないからか、環境が整っているからかとてもいい会議ができている。

「でも…これ、どうやって決めます？　今二人だし、多数決では決が採れないと思います。」

「そうねぇー…」

「候補だけ今ここで決めて、決は後で取りますか？　相談解決に向けて調べる途中でも、決める事くらいはできるでしょうし。とりあえず、相談の解決を最優先させて、後からでもいいんじゃないでしょうか」

「そうね、そうしましょう！」

「じゃぁ、今日は終わりですね」

僕は大きく伸びをして、立ち上がった。

「これ、食べてからでいい？」

「いいですよ」

Ｎｏ．３「とある人物の悩み相談」（後書き）

今回で少し、この小説の方向性が分かったんじゃないかと思います

というか、最近更新遅くてごめんなさい

忙しくて…

感想は、ぶろぐのほうによろしくです

ｈｔｔｐ：／／ｐｌａｙｌｏｇ．ｊｐ／ｇｚｚａ／ｂｌｏｇ／

Ｎｏ．４「あれれ？　こころ君ってこういうキャラだっけ？」

ＮＯ．４「あれれ？　こころ君ってこういうキャラだっけ？」

嘆息する。

いきなりだけど、嘆息する。

「やっぱり恋愛っていうのは、シュミレーションが大事だと思うのよっ！」

「会長！　それには、激しく同意ですっ！」

「そうねぇ…優ちゃん、それはあっているような気がするわねぇ」

「でしょでしょっ！？　ていうことで、恵ちゃんが来るまでの間、恋愛シュミレーションゲームをしましょう！」

再び嘆息する。

４話始まってまだ３４０文字未満。

嘆息２回。

「で、恋愛シュミレーションゲーム。この部屋にありましたっけ？」

「それなら、僕が持ってきてますよ」

「何！？」

「おぉ！　さすが信一君ね！」

「いやいやいや、普通に校則違反してどうすんですか！　生徒会でしょっ！？」

「いいのいいのーっ」

「ちなみに、パソコンならそこにありますから。これでできます

ね」
「こころ君、あなた、やりなさいっ！」
「えぇっ！？　ていうか、恵ちゃん来るまでって…部活終わってからって言ってましたから、何時間もありますよっ！？　まさか、全部ゲームに費やすつもりですか！？」
「そうよ」
「それに、こいつの持ってる恋愛ゲームなんて、どうせいけない描写とかが入ってますよっ！？」
「それなら大丈夫ですよ、なぜなら…全年齢推奨版だから！」
ん。まぁまぁ、まだそれなら救いようがある。これで１８歳以上対象とか言われたらもうどうしようもない。
金谷にまだほんの少し残っている純粋さに救われた。
「なら…いいですけど。」
「よし！　こころ君、やりましょうっ」
「僕が教えてさしあげますから、やってみましょう。」
「はいはい…」

嘆息する。３回目。本日３回目。
全く、僕はゲームなんて…
したことあるけど、健全なＲＰＧやアクションしかやったことがない。
美少女系なんて…
オタクのするものだ。
金谷みたいな。
秋葉原系の人がするものだ。
だけど…仕方がない。やってやろう。
頼むっ！　恵ちゃん！　早く来てくれっ

「じゃぁ、スタート。」
「初めからを押してください」

「いやいや、分かってるってそれくらい。」

“はじめから”をクリック。

そしたらムービーに入り…
なんともかわいらしい。キャラクター！
という感じのキャラクターが出てきた。
赤い髪の毛を二つにくくり、長髪。
けれど、身長は小さくてロリ。
一応、高校生らしい。
会話パートに入ったらしく、その女の子が喋りだす。

≪「私の名前は紅伊　智美だよっ！　よろしくねっ！」≫

選択肢が出てきた。

「初めての選択肢ですね、これで結構変わるんですよ。選んでみてください」
「ん、わかった。」

≪「よろしくお願いします」≫
≪「よろしくぅっ！」≫
≪「よろしく」≫

うわぁ…真ん中のは明らかにチャラ男だなぁ。
最初のは堅すぎる。となると、最後のやつが一番いいのかもしれない。

≪「よろしく」≫

「ナイスな判断ですねぇ。」
「うぅ…」
「最初のは堅いもんねっ。真ん中のはちょっと嫌だわ」
「そうです！　真ん中をクリックすれば…おそらくチャラ男というレッテルを貼られてしまうでしょう！」
「さすがこころ君ね、女心というか、そういうのがわかってるっ！」
「優ちゃんはそういうこころ君ｎ…」
「はいっ！　早く進めましょっ！」

ん？　なんだったんだ？
ちょっと聞いてみたかった様な気もするけれど。
覆いかぶさったということは、本人は言われたくないことなのだろう。
というわけで、追及はしない。
そしてしばらく会話をして…次の選択肢。
「ここで、何ルートを辿るかが決まります」
「ルート？」
「誰を攻略するか。ということです。まぁ、誰が彼女になるか、ですね」
「ふーん。」
ここから先はまずい。
いくらゲームキャラとはいえ…
僕には…
バン！

「遅れましたぁっ！」
「あ、恵ちゃん！　待ってたわよぉっ！　ささ、こっちに来て！」

嘆息。４回目。
助かった。非常に助かった。
恵ちゃんが来るまで、ということだったので僕はセーブもしないで消した。

「生徒会の皆さん、本当に遅れて…」
「いいよいいよ、部活があるんだし。仕方ないよ」
「そうだよぉ、仕方ない仕方ない」
「そうそう！　それより！　早速始めましょうよっ！　調査！」

…すごく乗り気だ。目が輝いている！
いや、乗り気なのはこの前から分かっていたけれど…ここまでとは。
結構面倒だぞ、恋愛相談って。
しかも解決だぞ、完全解決と言い張っているんだぞ、あなたは。
どれだけ大変なことか…
そして、この恵ちゃんの信用仕切っている眼差し…
これは後戻りできませんよ、優先輩。

「まず、相手の事をよく知らないといけないと思うのっ！　…そこで！」
「そこで？」
「生徒会の特権を行使します！」

生徒会の特権。
生徒会が、この学校内で持っている特別な権利のこと。
普通の学校では、こんな特権存在しないのだけれど。
ここであげておこう。

〒十一

――生徒会の特権――

壱. 生徒名簿をいつでも見れる。
弐. 職員の許可を得れば深夜１２時までなら学校に残ってもよい。
参. 生徒集会を生徒会の一存により開いてもよい。
四. 全ての部屋の鍵を所持してもよい。
伍. あらゆることの承認権は生徒会にある。
六. 行事の開催については生徒会に一任する。
七. 校則の調整を職員との話し合いで行ってよい。
八. これらの権利を行使することを認める。

十二〒

以上がこの学校の生徒会に認められている特権。
今回使えそうな特権は…壱と弐くらいか。
場合によっては参も使えるな。

「というわけで、壱を使って相手の事を知りましょう！」
「では、早速名簿を取りに行ってきます」
「まかせた！　会計！」
「それで、相手の事を知ったあとはどぉするのぉ？」
「積極的にアプローチよっ！」

うわぁ、普通だぁ。

でも、それが一番得策かもしれないな。
恋愛経験は豊富でないけれど、アプローチすることの大切さは知っている。

「特権弐も使えませんか？」
「どうするのー？」
「アプローチにはですね…やっぱり、肝試しでしょう。夜の校舎って怖いですからねー。二人で一緒に肝試しをするんです。もちろん僕達も参加でね。」
「なんで私たちまで参加するのよぅ」
「それはですね、見守る。というのもありますし、いきなり二人きりで肝試ししてくださいはおかしいでしょう？　だから、僕達で今度肝試しするんですよ。一緒にどうですか？　という風に誘うんです」
「それで、あの二人を一緒の組にする。というわけね」
「そういうことです」
「いい案じゃないのぉー、ねぇ？　優ちゃーん？」
「そ、そうねっ！　いい案ねっ！　採用っ」
「アプローチの方法まで考えてくださって、ありがとうですっ」
素直でいい子だなぁ。っと…駄目だ駄目だ。

「いいんだよ、私達生徒会にまっかせなさいっ♪」

優先輩…調子に乗ってる。
でも、いいや。久しぶりに…

「名簿取ってきましたぁー」
「仕事が早いわねー」
「さぁ、見てください」

「どれどれ…」

金谷は、パラパラとめくって目的のページを開けると、胸を張る。
見てみると、美青年。
趣味はホラー小説を読むこと、怪奇が好き。
お、これは肝試しに誘いやすい。
そして、これは…
恵ちゃんがびっくりしてそれを宮野先輩が受け止める。
これはフラグが立つ。
それにしても…宮野先輩。僕と恵ちゃんからすれば2年も上かぁ、
そろそろ卒業なんだなぁ。
2年上の人に恋するって、大変そうだなぁ。
1年上ってだけでも大変そうだけど…

「うぃーっす、お前らぁ。調子はどうだー？」
「んー？　あー、はいー。」
「なんだこころその微妙な反応は！」
「あぁ、芝　里紗子先生ですか。」
「何故にフルネーム！？」
「調子はですねー、いつも通りですよー」
「何その私だけいつも微妙な扱い！」

この明らかにドMといった感じの先生は、生徒会顧問の芝　里紗子。
茶色の髪の毛。短髪。
大人の色気漂う美人先生と人気なのだけれど…
僕らにとっては「ただのふざけた奴。」
でしかない。
このひどい扱いをすることになった経緯についてはまた別の機会で

話すことにしよう。

「まーたお悩み相談かぁー。」
「は、はい…ご無沙汰してますです」
「恋愛相談ですよ」
「はっはーん…キラーン」

ん？　目が光った！
キラーンっていった！　しかも自分で！

「恋愛相談なら私におまかｓ…」
蹴り。蹴りを一発入れて、生徒会室から外へと追い出す。そして、鍵を閉める…
内側から。

「ふー。」

僕はパンパンと手を払い、嘆息して席に座る。あ、５回目。

「よかったんですか？　その、先生ですよ？」
「あー、いいのいいの。あの先生には、いいんだよ」
「そうよー、恵ちゃんー。あの先生にはあれくらいがいいのよ」
「もっとも、追い出さなければここの空気が乱れていたでしょうからね。賢明な判断です。」
「そうなんですか…」
「じゃ、話の続きですけど…」
「それなら、さっきまで話してたことでおっけいよ、万事オッケイ！　明日から、声をかけていきましょう！」
「じゃぁ、次は…」

「文化祭のテーマについてねっ！」
「ちょっと待ってください、それは昨日二人で決めたんじゃぁ…」
「候補だけ決めたんだけどねー、どうやって決めるかっていうことで問題が生じたのよぉー」
「そういうことですか、では…候補はなんなんですか？」
「これよっ！　このはくん！　オープン！」
「オープンってなんすか！　何も用意してませんよっ？　…コホン。えっと、第一候補・競争。第二候補・なんでもあり。」
「二つ目のは会長ですね」
「なんでわかるのよっ」
「ふふ…っ、性格出てるわよ」
「にゃわぁ…」
「大丈夫ですよ、優先輩っ」
「こころくん…」
「優先輩は、それでいいんです」
「何がっ！？　全然フォローになってないよっ！？　こころくん！？　そういうキャラだっけ？　ちょっと最近Sになってきてないっ？」
「優先輩ぃー、脱線させちゃぁいけませんよー。会長なんですからー」
「いや、これは信一君の責任でしょうっ」
「違いますよね、みなさん。」
『そうそう。』（優先輩以外全員）

うん、やっぱり優先輩いじりは面白い。
僕が最近いじりキャラに目覚めて来たのは、半ば優先輩の影響なのだけれど…
これも今は話さないでおこう。

「…コホン、さぁ！　多数決を採りますっ！　1番がぁー、いい人っ！」
「はい」
「はい」
「はい」

満場一致…勝った！
「あわわぁ…」
「じゃぁ、文化祭のテーマは競争で決定ですね、書記取ってください。」
「い、いいもんっ！　いいんだもんっ！　別に悔しくなんかないしっ」
「じゃぁ、先生に提出してくるわ」
「よろしくお願いします、利津先輩」
「なんか疲れたぁ～！　こころ君―、私と恵ちゃんにお茶いれなさいー」
「はいはい」

僕はお茶の入っているポッドでお茶を入れると、二人の前に出す。
ちなみに熱い番茶。
職員室にあるようなポッドだ。
といっても、職員室に全く入ったことのない学生は分からないと思うが…入ったことある人なら分かるだろう。

「おいしぃ～！　番茶最高っ」
「おいしいですぅー」
「恵ちゃん、初対面の時とキャラ変わってない？」
「そんなことないですよー？」
「優先輩、ここに来ると誰でもキャラが変わるんですよ、きっと。いや、絶対」

「なにそれっ！」
「生徒会キャラ崩壊の法則、ですよ」
「いやいやいやっ！　そんな法則ないからねっ！　ていうかどんな法則よっ！」
「突っ込みが板についてきましたねー」
「最近…私とこころ君の立ち場、逆転してない？」
「気のせいです。」

僕はふと時計を見る。
時刻は下校時刻前だ、そろそろ帰らなければいけない。楽しいのに…
「そろそろ下校時刻ですよ、ほら、優先輩ぃー、みんなも帰りましょう」

〒±

というわけで、校門前。
「今日は本当にありがとうございました。これから、よろしくお願いします」
「うん、よろしくねぇー恵ちゃん！」
「じゃぁ、本日は終了！」

Ｎｏ．４「あれれ？　こころ君ってこういうキャラだっけ？」（後書き）

こころ君と優先輩のボケと突っ込みは
逆に！

いろいろあって立ち場がかわったんでしょうね
また別の話ですけど

この話。結構気に入りそう（自分で）

いいじゃないですかー
コメディ。
当初の予定とは少し方向転換したけれど…

僕って、お笑い要素含んだほうが
いいらしいです。

今日判明しました
部活で、いろいろ書いてたら
ふざけて書いたので

型物副会長を
笑わせましたよっ
一発オッケイもらいましたっ

でも、これは少し暴走しすぎかな？
と感じる点も…

そんなこんなで
生徒会、やっていきます。

感想くれるとうれしいです♪
ではっ！

http://playlog.jp/gzza/blog/

「もう少し尊敬の目で先輩を見なさい！」

Ｎｏ．４「もう少し尊敬の目で先輩を見なさい！」

「やりましたっ！　ついに話しかける事が出来ましたっ！」
「おぉー、やったねー」
「その調子よっ！　恵ちゃんっ」
「じゃぁ、次のステップですねー」
「次は次はぁーっと…」
「肝試しに誘う。ですよ、優先輩っ」
「そうね…でも待って、もう少し仲良くなってからがいいんじゃないかしら？」
「まぁ、確かに。いきなり誘うのは不自然ですからねー」
「そうよねっ！　よし、じゃぁ。もう数日間、積極的に喋りましょう！　それで、きっかけをつかんで…肝試しに誘うのよっ」
「それは名案だわ、優ちゃん」
んー、ただ単に肝試しが怖いだけじゃないか。なんて疑問は口になど出せるわけもない。
まぁ、実際そうなのだろうけど。
「打ちとければ、肝試しに誘いましょうっ」
そして事態は数日後へとスキップされるのだ。

〒±

数日後、例のごとく恵ちゃんが報告にやってきた。

「やりました！　今日、自然な流れで肝試しに誘えました！」
「お、やったねー恵ちゃん。」
「やったじゃないっ！　で、肝試しはいつっていうことにしたの？」
「明日です」
「ふぇ？」
「明日」
「明日…」
「ダメ…ですか？」
「いいえ、そんなことないわ！　大丈夫！オールオッケイ、もーまんたいよ！」
「ギャグ古っ！」
「そ、そんなことはどうでもいいのよこころ君！」
「じゃ、じゃぁ…明日の１０時に校門集合ね！　こころ君は私の家まで迎えにきてっ！　会長命令よっ！」

怖いのか。夜出歩くのも怖いのか。
それか、肝試し不安だから、か。
どっちにしろ、やっぱり怖いんだな優先輩は。
これは、おもしろくなりそうだぞ。
その命令はもちろんオッケイというもので、いろいろ願ったりかなったりだ。

「わかりましたぁー、迎えに行きますね」
「では、我々は現地集合ということにしましょう。お二人は一緒に来るようですが」
「そうね、そうしましょう。ね、優ちゃん」
「宮野先輩には私から伝えといておきますねっ」

よし、明日が楽しみだなぁ、いろんな意味でね。久しぶりに優先先輩の…
僕は一瞬の黒笑いを浮かべた。
もちろん、優先輩には気づかれないように。
利津先輩には、お見通しの様だけれど。

「心君、」
「はい？」
「優ちゃんのあの姿久しぶりに見れるからってあんまり浮かれちゃだめよ？　あと、一人で優ちゃんで遊ばないようにね、私も混ぜるのよ、いいね？」
「わかってますよ、利津先輩」
「そこ！　なにひそひそやってるのよっ！」
「特になにもないわよ？」
「そうですよー、優先輩」
「怪しい…」

あの眼は…なにかを推理している時の目（ついたあだ名は目つき悪っ！）じゃなくて…あれは、疑っている時の目だっ！
怖い、少し怖いですよ優先輩！

「ほんとになんでもないですから、安心してください、優先輩っ」

僕はわざとらしいグッドポーズをとる。
だけれど優先輩にはわざとらしいとは映らない。なぜなら…馬鹿だから。馬と鹿と書いて
バカだから。

「ふふっ」
「ん？」
「あ、いや。生徒会の皆さん、面白いなと思って…ふふっ」

お上品な笑いだなぁ～、でも文字だとどう伝わるのだろう。不気味？
でも、本質はお上品。

「さぁ、明日が楽しみですねっ」
「そ、そうねっ。楽しみねっ。」
「皆さん、作戦とか関係なく素で楽しんでくださいねっ」

というわけで、またまた翌日にスキップだ。

〒±

9時45分に優先輩が僕の家まで迎えにきた。
懐中電灯を2本持参していた。
優先輩、実はとても怖がりで…（これまでの話で気づいた人もいるだろうけど。）
そして、夜になると…キャラが変わる。
甘えん坊さんになるのだ。
そしてそれを知っている僕と利津先輩は、今日とても楽しむだろう。
Sキャラに目覚めた二人で…

「じゃぁ、行きましょうか。」

「う、うんっ！」

僕達は家を出て、学校への道を歩きだした。
ん…なんか優先輩がぴったりとひっついてくる。
まさか…もう怖いのか。

「優先輩、そんなにくっつかなくても…」

正直言うと、かなり恥ずかしい。
うれしくないわけではないんだけれど、恥ずかしい。女の子にぴったりとくっつかれているのだ。
しまいには手まで握られている。
どんな素的イベントだよ…

「手…離しちゃやだよ…？　こころ君…」
「は、はい…」

破壊力！　キャラ萌えとかそういうのじゃなく、リアルにこんな人が存在するのが脅威だ！
金谷が見たら発狂しそうな…

「優先輩、今日大丈夫ですか？」
「大丈夫よ…？　こころ君、先輩のこと馬鹿にしてるでしょ～。だめなんだよ？　先輩には尊敬のまなざしを向けなきゃなんだからねっ？」
「尊敬は、してますよ。僕は優先輩のおかげで救われたんですからっ」
「もう～、恥ずかしいじゃないのぉ…」
「すいません」

僕はにっこりと笑顔を向けた。
そしたら、優先輩もにっこりと…笑顔を向けてくれた。
ものすごくかわいらしくて、愛らしい。
それでいて、綺麗。
僕は幾秒か見とれてしまった。

「こころ君〜？」
「え？　あ、はいっ」
「学校、ついたわよ〜？」
「あ、そうですかっ。ははは…」
「ん？」
「や、な、なんでもないですっ。さ、行きましょう」
「あ、優ちゃん！　こっちこっち！」
「利津先輩、もう来てたんですかぁ」
「うんっ、もう来てたわよ。」
『早く優ちゃんの夜のキャラが見たいからねー』
『そういうことでしたら、オールレディですよ。』
『なんで英語…？　あぁ、だから二人…手をつないでるのね』
『なっ…そ、それについてはなるべく触れないでもらいたいです…』
『あ、心君赤くなってる…ふふふ。』
『え、あ、いやっ。その…』
『私には、白状しないと…』
『なんでもないですってっ。』
『ほんとに何もないの？　…ちっ』
『えっ？』
『なんでもないわよ、さ。いきましょう』
「さっきからなにこそこそ話してるのよぉ」
「なんでもないですよっ。さ、みんなのところに行きましょう」

「う、うんっ！」

優先輩…かわいいなぁ。っと…

利津先輩に殺されるっ。あの先輩は若干百合っぽいからな。

優先輩のことを好きかもしれｎ…っと。やばいやばい。

執筆過程を見られたら何を言われるか…

「さてと、全員揃ってますよ」

「どうも、生徒会の皆さん。」

「あなたが、宮野先輩？」

「はい、今日はよろしくお願いしますね」

「宮野先輩っ！　行きましょっ」

「じゃぁ早速、肝試し始めますか」

「では、生徒会の皆さん。先にいってますね」

「あ、はいっ」

宮野先輩と恵ちゃんが二人で並んで学校に入って行った。

そして、数分たった頃。

僕らも行きますか、と歩いて合図。

学校に入るなり、非常口の緑色のランプが妖しく光っている。

それだけで、優先輩はびくびく震えている様子だ。

僕は優先輩の手をいまだ握ったまま懐中電灯をもう片方の手に持って、学校を探索。

なにもないのは明白だから、気軽～に進む。

僕も、どっちかというと怖いのは苦手。

だけど、何もないと分かっている肝試しくらいならどうってことない。

なにかあったら、別だけど…

「そういえば会長」

「な、なに？」
「霊が出る時間帯って深夜１２時ってされてますよね？　あ、あと丑三つ時」
「そうね、テレビとかでよくきくわよね優ちゃん」
「でも本当は…」
「本当は…？」
「時間帯関係なく、出るらしいですよ。」
「わふぅ～…」

優先輩がふらぁ～っと、僕に倒れてくる。

「優先輩！」
「会長？」
「あらあら、優ちゃん…信一君？」
「は、はい？」
「優ちゃんいじめちゃだめじゃないの。」
「優先輩は怖いのに弱いんだよ。あと、夜ってだけで怖くて性格変わるんだ。」
「こころ君～…金谷君がいじめる…」
「よしよし、大丈夫ですよ優先輩。」
「そうよ、優ちゃん。出るわけないじゃない…幽霊なんて。」

利津先輩が怖い顔を作って言う。
完璧遊んでいるな…この人。
これじゃぁ逆効果じゃないか。

「歩こぉよぉ…早く終わらせよぉよぉ…」
「わかりました、立てますか？」
「…手、握っててね？」
「握ってますから、立ってください」

「うん…」

優先輩がよろめきながら立って、僕の手を再び握る。
泣きっ面になりながらも、がんばって校内一周を目指す。
　それにしても金谷…知らなかったとはいえ怖がらせすぎ。
優先輩をこんなに泣かせたことは僕ですらないのに…
いじろうと思ってたけど、そういう場合じゃないな。支えようじゃないか。

「でもまさか…会長にそんな癖があるとは…驚きでした。」
「癖って…なんか変な言い方するなっ」
「お、やけに真剣ですね。いつものいじりキャラは何処へ？」
「こんな状態の優先輩をいじれるわけないだろ。」
「こんな状態だからこそいじるんじゃないですか、それが真のいじりキャラというものですよ。」
「いや、僕元々突っ込みキャラだから。ものすごく激しい突っ込みするキャラだから。いじりキャラは第二だから！」
「残念ですね、貴方とは通じる所があると思ったのに…」
「あんたと通じたくなんかなーわっ！」
「そんな、ひどいっ！　ひどいわっ」
「追いかけなさい、心君も本当は…」
「やめろよその本当は両想いなんだろみたいなの！　しかもＢＬじゃなーかそれじゃぁ！」
「えー。」
「えーじゃないですよ、えーじゃ…しかも本当に走って行ったし。」

そして、金谷が走り去って行った直後。
何か物音がした。
そして、皆恐る恐るその方向を向いていると、真っ白な服を着た足

の無い人が出てきた。
まさか…

「出たあああああああああああああ！」
「きゃぁあああああああああああ！」
「うわあああああああああああああああああああ！」

〒±

「やりましたよ！」
「…何が？」
「先輩と付き合うことになりました！」
「よかったじゃない」
「はい！　美菜さんのおかげですっ」
「いえいえ…」
全員ぐったり。
先日の事件のせいで皆はぐったりとしている。
幽霊…本当に居たんだ…

「もう少し尊敬の目で先輩を見なさい！」（後書き）

次回から、短編連作の形を取ります

そしてギャグ要素を磨いていきます

感想、お待ちしています

ｈｔｔｐ：／／ｐｌａｙｌｏｇ．ｊｐ／ｇｚｚａ／ｂｌｏｇ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4692n/

香椎浜高等学校生徒会！！

2010年10月9日18時34分発行